

コロナ禍の未曾有の状況下、世界が大きく変わるうとし、後戻りはできないと言われている。では、どう変わるのだろうか。子供たちの未来は、教育はどうあればよいか、見えない日々である。これらを考える手がかり、光明となる著書が出された。

編者の「クーリエ・ジャポン」は世界中のメディアから厳選した記事を日本語に翻訳して掲載する月額会員制Webメディア。米国の有力紙から英語圏以外の有力メディアの記事まで多様なメディア、ジャンルの記事を掲載し、高い評価を得ている。

本書は、世界最高の知性と洞察力を兼ね備えた賢人16人が、歴史学、歴史人口学、哲学、経済学、人類学、生理学、進化生物学、精神医学、ジャーナリズム等々の専門分野の立場から世界の今を分析しつつ、世界のこれらについて論じたものである。

各賢人へのインタビューを中心に加筆修正した論考を、「コ

新しい世界 世界の賢人16人が語る未来



クーリエ・ジャポン 編
990円 講談社現代新書
☎03-5395-3410

ナと文明「不透明な世界経済の羅針盤」「不平等を考える」「アフター・コロナの哲学」「私たちはいかに生きるか」といった章(テーマ)に分けて示している。トマ・ピケティやマイケル・サンデルはよく知られているが、ごく最近の新たな論考を興味深く読んだ。格差、能力主義、分断、資本主義等、幸福の条件等々を改めて考えさせられた。記者等の問いかけ、賢者の語りのいずれも読みやすく分かりやすい。

我が国への気になる問いが一つある。「いまは平均寿命が80歳を超える時代です。なぜ6〜10歳の子供に全力疾走をさせるのでしょうか」。

これにどう答えるか。

「新しい価値が育つはず」というこれからの世界や教育について、賢人と対話してみよう。

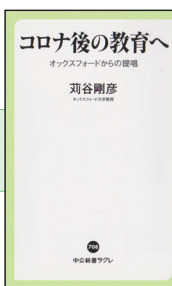
(教育調査研究所・寺崎千秋)



2020年度は新指導要領、GIGAスクール構想、新大学共通テストなど、教育の一大転機だった。そこにコロナ禍が直撃し、オンライン化が加速した。だが、本書は、文部科学省や経済産業省の構想について、印象論やエッセイ型思考から発想される改革案であるとして、格差や「知」の面での問題を指摘する。2007年の学校教育法改正以後、為政者を統制する法の支配の思考が日本の教育改革を主導するようになり、上位法から下位法までの一貫性を求める政策立案の発想が、教える内容や教え方の細部にまで浸透するようになったと言うのだ。そして、この思考様式が演繹型思考と結び付くことで、日本の教育改革神話が強化されてきたという。

しかも、教育改革の目標に掲げられる表現の中身や改革が目指

コロナ後の教育へ オックスフォードからの提唱



荻谷剛彦 著
946円 中公新書
☎0120-29-9625

す資質・能力の内容は一見変わったように見えても、そのでの論理構成は一向に変わっておらず、議論の「正しさ」は、事実を照らした妥当性によって保証されるのではなく、社会での通用性によって受け入れられてしまっている」と批判する。

著者は、英国と日本を比較し、日本では大学改革を主導する政府の前提が「大学性悪説」であるのに対して、英国では大学への社会のリスクペクトがあるから、大学が自由や表現の自由が保障される機関として、とりわけ人文系学問がコロナ禍での対応を冷静に相対化できる「賢い市民」を育成する役割を果たしていると言う。

評者は、教育改革を時代の要請と捉える立場だが、それでもなお、教育のローカルティと学問を尊重する社会こそ、子どもにも大人にも望ましい市民教育を実現するための基本的条件だと感じる。

(前聖徳大学教授・西村美東士)